

# ロマネスク教会

## ジャン・コラルド

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニューイ=サン=ジールジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、テッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



ルネサンス期のオランダ人哲学者エラスムスは次のように書いています。

「祝福されし大地ブルゴーニュよ、君はみな之母と呼ぶにふさわしい。君の乳房からはかくも味なる乳が出るので」

酒を楽しむ者ならば心から共感するこうした物質的側面に加えて、私たちの地方にはその美しいイメージを見事に補足する精神的側面もあります。この精神性は天と地の融合を象徴するかのよう、人間の才能の発露により、わが地方の風景のまっただ中に刻み込まれています。それは私たちの地方がキリスト教化されたことの最初の証となった、ロマネスク教会群です。キリスト教化は順調に進んだわけではありません。父祖伝来の習慣に執着したわが地方の農民の抵抗が強かったからです。その結果、彼らに「異教徒」を意味するラテン語の「Paganus」という名前がつけられました。この言葉から「paysan（農民）」という語が生まれたのです。

4世紀まで続いた「バクス・ロマナ（ローマの平和）<sup>(\*)1</sup>」の後、ゲルマン民族の大移動の時代が到来します。ハンガリー民族、ヴァンダル族<sup>(\*)2</sup>が、すでにアジア大陸の大部分を征服していたトルコ・モンゴル系部族であるフン族<sup>(\*)3</sup>に追いやられ、東から西へ大移動したのです。続いて、ノルマン人<sup>(\*)4</sup>が北からやってきて、南からはアラブ人がローヌ川とソヌ川をさかのぼってやってきました。

シャルルマーニュ<sup>(\*)5</sup>は、ゲルマニア<sup>(\*)6</sup>の神聖ローマ帝国とともに秩序の回復に努めましたが、彼の死後再び無秩序状態に陥ってしまいました。「1000年」という象徴的な年に、人類は飢餓、伝染病、略奪といった史上初のありとあらゆる災禍に直面したのです。このような終末を前にして、読み書きのできない農民の恐怖は大変なものがあったでしょう。農民の無知を利用し、ご立派な伝道師は農村を駆け巡って聖ヨハネの黙示録が預言したこの世の終わりを触れ回りました。現世での善行は来世での救済と永遠の幸福に通じると説いたのです。こうして大修道院は農民から寄進を受けるようになり、それによって領地を拡大することができました。

ところが、1000年を過ぎてても天変地異は起きませんでした。それどころか長患いの病人も健康を取り戻したので、人々は再び将来の計画を立て始めました。村々は再建され、クリュニーに代表されるような繁栄の一途をたどっていた大修道院は、壮麗な建造物の建設

に乗り出しました。これら驚嘆すべき建造物を目の当たりにした村人たちは、あえてそれらに対抗しようとはせず、できるだけ質素な祈りの場ができることを望んでいました。人々がいつも参会して古代の神々をあがめたのがまさにそうした場所だったからです。しかしクリュニーという手本が常にそこにありましたので、村としてはやはり自慢できるような立派な教会を建てようという気運が高まってきました。

今日でしたら、建設資金の調達がまず問題となるでしょう。しかし、当時の人々は真つ先に救いの神にすがりました。神はときとして隣国の領主からの寄進という形で、あるいは信徒の善意や献身となって現れました。もっとも、立派な建造物の建設に不可欠な材料である石や木をふんだんにご提供くださったのですから、神はすでにお姿を現しにいられていたのでしょう。

宗教家、もしくは近隣の修道士、すでに小教区が形成されていたのなら主任司祭がやってきて、全信徒が参集する儀式の最中に建設予定地を祝福しました。次に、キリストがかけられた木の十字架の象徴的表現であるラテン十字の形にあわせて、将来の建造物の図面が地面に引かれました。十字架の縦の主軸は教会の身廊を、横軸は交差廊（初期の建造物にはまだ交差廊はなく、もっと後になって不可欠なものとなった）を形作っています。

身廊と交差廊が交わるころは中央交差部を形成し、鐘楼の土台の部分にあたります。身廊の東側部分は後陣または東端部を形作っていますが、十字架のキリストが頭を置いた部分にあたることから、あらゆる部分で最も神聖な部分となっています。なぜ身廊の東側部分なのかというと、教会はすべて東方に向けられなければならないからです。毎朝新たな一日の太陽が昇るのも東、知識の源も東、聖なる場所やかつてエデンの園があったのも東。先史時代の人々の原始的な住居は常に東を向いていたことから、これはおそらく隔世遺伝的に伝わったものでしょう。

次に、場所の神聖化のために不可欠な作業があります。祭壇が建てられようとしている場所に聖遺物を置くことです。聖遺物はときとして本物の十字架の一部や、たいていの場合聖者の遺骨から成り立っていました。程度の差はあれ、すべて聖者のものと認められていましたが、その名声が高いほど、特に奇跡に裏づけられたような聖遺物は群衆の心を惹きつけました。巡礼者の心を惹きつけるものは、



自然と教会や共同体の貴重な収入源となりました。

いずれにしても、エルサレム、ローマ、特にサンチアゴ＝デ＝コンポステラといった聖地に向かう巡礼は、当時すでに一大ブームを巻き起こしていました。サンチアゴ＝デ＝コンポステラへのルートは、当時「サンチアゴへの道」と呼ばれていた天の川によって今でも天空にはっきりと描かれています。この天の川は銀河系の星団から成り立っていて、そこから星の領域を意味する「カンポ・ステラ」という名前が生まれ、それがコンポステラとなったのです。こうして今日でも、ヴェズレーのローマ式バシリカ聖堂とコンポステラのバシリカ聖堂とを隔てている1,800kmあまりの道程を踏破する勇ましい巡礼者が後を絶ちません。

ロマネスク様式の建造物において、もう一つ重要なものがあります。それは「鐘楼」です。人々が教会を欲しがるのは、もちろん天国への道を示してもらうためですが、旅行者、特に巡礼者にとってはできるだけ遠くから村の場所を教えてもらうためでもあるのです。ロマネスク教会はその建築上の性質から相当控えめな存在でしたが、ゴシック様式の到来によりあらゆる大胆な建築が可能になったため、村の場所を示すにはうってつけの存在となりました。

サンチアゴへの道がいくらの地図に示されようと、霧が立ちこめたり月明かりで星が消されてしまった夜にはその役目を果たしません。そのとき道に迷った旅行者が頼れるのは、耳に届く音だけです。犬の吠え声は村が近いことを示してくれますが、鐘の音は遠くからでも聞くことができます。鐘が重要な役割を持つと同時に、鐘は建造物の中央塔に備えつけられるようになりました。こうして、鐘楼は洗礼や結婚といった慶事から葬式のような悲しい出来事にいたるまで、昼夜の区別なく村の生活にリズムを与えるようになったのです。また、鐘楼には火災や強奪者の到来、戦争への動員を意味する早鐘によって災禍を警告する役目もありました。情報を伝達する暗号も存在しました。夜になって凍結の恐れがあると、植物を守るよう通告するために見張り番が警鐘を鳴らしたものでした。

次に鐘楼を降りて教会の中に入ってみましょう。まず、西側の正面扉口の上にタンパンが見えます。これはアーチ割り形と楯(\*7)に挟まれた空間で、マンドルラ(アモンド形的光輪)に囲まれた玉座にすわるキリスト像がよく描かれています。扉口の先には多くの場

合ナルテックスがあります。これは閉ざされた広間で、まだ洗礼を受けていない者や神聖な場所に入ることが許されない者が待機する場所となっています。

続いて、この暗い場所から光のほうに向かって進みます。途中で洗礼盤があり、聖水が蓄えられています。洗礼に使われるもので、あらゆる生命の源である原水の特徴です。昔は中央部に木製の説教壇があり、そこから説教師が信徒に向かって神の言葉を授けました。

さらに進むと中央交差部にたどり着きます。大きな窓から採光がなされ、知識の象徴である光が降り注ぎます。

当初身廊にはなにもなく、信徒は立ったまま聖務日課(日々のお祈り)に参加していました。この日課は長くかかることが多く、午後の晩課で締めくくられることもしばしばでした。このお勤めをきちんと実行する信者は年輩者が多かったため、彼らをいたわるためにベンチ、ついで椅子が備えつけられたのです。後に暖房設備など改善措置がなされたにもかかわらず、今日足繁く教会に通う人は決して多くありません。信徒は信者であることに変わりありませんが、お勤めをきちんと実行する者が減ってきているのです。

しかし、信者であるないにかかわらず、訪れる価値のあるこの比類なき遺産が私たちに残されています。その当初の素朴さから後年の発展ぶりを見て、ある歴史家は言いました。ロマネスク建築は「天にも届くばかりの立体感の連続である」と。

- (\*1) ローマの軍勢力によって地中海世界に成立した平和
- (\*2) 5世紀初頭にガリア、南スペイン、北アフリカに侵襲した古代ゲルマンの一部族
- (\*3) 4、5世紀頃ヨーロッパに侵入し、ローマやガリアを脅かした。
- (\*4) 北仏にノルマンディー公国を建て、1066年イギリスを征服しノルマン王朝を始めた。
- (\*5) フランク王(742-814年)、西ローマ皇帝として西方キリスト教世界を統一。
- (\*6) ローマ人がライン川東部、ゲルマン人の居住地域に与えた名
- (\*7) 窓、出入り口などの開口部上部に渡す水平の梁のこと。

### ブルゴーニュへ、ようこそ

中世が、ほだに思っているブルゴーニュへいはいせんか、  
種上の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメスランの敷々、  
中世そのまの樹なみ、美しく広がる大地や、小さな村々、  
豊かな生命力とほだのぬくもりを感じる地方、  
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ  
(株)多摩企業開発 担当: 岩沢  
Tel. 03 3582 5087

